

除去を含意している。われわれはその範囲を限るよりは拡げる方を選好する、丁度よい限度を守ることが不可能であるから、少し余分である方が僅少すぎるよりはよいことと考える⁹⁾。

また社会学の影響をうけて、専門科学の分類も変化していく。そして学問間の関係もその称呼や方法もまた変化していく。今日まで社会の領域は統一的な計画はなく、各学科によって領域は独立に区別されてきた。そのため色々の不合理な混乱や区別が生じてきた。たとえばドイツで *Völker Kunde* とよばれる学問は同時に習俗に関すること信仰に関すること住居に関すること家族等々を含んでいる。また *Kulturgeschichte* も同様各種の領域を含んでいる。

「だから新しい区別が考えられ、古いものに取り代ることが重要である。そしてそのため社会学が介入してより合理的、より方法的な区分が確立されることが期待される」¹⁰⁾ のである。

なおここで年報の第一輯だけについてその第一部となる独自の論考 *Mémoire originaux* にてふれたのだが、序文で間接にこれと関した言及があるので、それについても少し詳しく触れておきたい。

デュルケームはこの第二巻の序文 *Préface* の中で内容の問題についてふれて次のようにのべている。「われわれの *Analyses* (文献の批判的紹介) の冒頭に今年も昨年同様、宗教社会学に関するものをとりあげるが、この優位の取扱に驚いている人がある。しかしそれは宗教現象があらゆる社会現象の萌芽であり、すべての現象は宗教現象から派生したからなのである。宗教はその中に最初から、混沌とした状態においてであるがあらゆる要素を含んでおり、それらの要素は無数の仕方で相互に分離したり、決定し合ったり、結合したりして集合生活のさまざまな表示を生み出したのである。科学や詩が生じたのは神話や伝説からであり宗教的装飾や崇拜の儀式から造型芸術が生れ、法

や道徳は儀礼の慣行から生れたのである。」

「われわれは世界像、靈魂、不死、生命に関する哲学的概念をその最初の形態である宗教的な信仰を知らなければ理解できないのである。また血縁関係 (*parenté*) は最初は本質的に宗教的な関係として認められてきたし、刑罰、契約、贈与、賛辞はそれぞれ贖罪的供犠、契約的供犠、聖体拝受的供犠、名譽的供犠等の変形したものである。ただ経済組織に関しては例外ではないのか、それは別の源泉から生じたのではないかと自問してみることが出来る程度である」¹¹⁾。デュルケームはこの問題に対しては留保しておこうと決定をここでは行っていないが、その他の多くの問題はもしそれが宗教社会学との関係を認識されると全く別の面をもって現れることを主張する¹²⁾。このような次第で、彼が最初の二巻に刊行した二つの論考 (*mémoires*) はこの宗教社会学の領域に属するものなのである¹³⁾。デュルケームはここで社会学者の中には今日の社会現象の進化の方向を見るのに必要な程度に理解するためには、現在のわれわれの経験において与えられた限りにおいて考察すれば十分で、遠く離れた起源にまで溯ることは無駄であり、無役な手続ではないかと考える人もあるが、そうした急速な方法は幻想にみちているとして次のように答えている。「社会的現象を外部から考察し、その下部構造を見のがすことでは社会的現実を真に知ることはできない」¹⁴⁾ と。そしてこの現実を知るためにはそれがどのように構成されたかすなわち現実が歴史の中で漸次構成されたその仕方を知らねばならず、多少成功の機会があるようにそれがどのように成るのかをつまみ、未来の社会はどう成るのか、どう成るべきかを予言するためには最も離れた過去の形態を知ることが不可欠なのである。いずれにせよ現在を知るためには、それから離れて見なければならぬのである¹⁵⁾。

デュルケームが歴史を重視する意味はそこにあ

9) *op. cit.*, p. 137

10) *op. cit.*, p. 137-138

11) *ibid.*,

12) *ibid.*,

13) これは第一巻の「近親婚の禁止の起源」を扱ったものと第二巻の「宗教現象の定義」の二つをさしている。

14) *op. cit.*, p. 139

15) *ibid.*,